

北大塚古墳群（井手町）

北大塚古墳群は、木津川右岸の丘陵上に分布する古墳群です。古く明治・大正時代には埴輪や横穴式石室の石材などが出土していたことから、「北大塚古墳」の名称で知られ、単独の古墳と考えられていました。

府立特別支援学校の建設に先立ち、当調査研究センターで発掘調査を実施したところ、横穴式石室を埋葬施設とする直径 16.0mの円墳が2基、直径 6.9mの円墳が1基、墳丘規模の不明な古墳が1基の計4基が確認されました。このため、遺跡の名称が「北大塚古墳群」に変更されました。

見つかった古墳は、いずれも石室の石材の大半が抜き取られ、後世に削平されていました。しかし、石室内や古墳の周囲で出土した須恵器や土師器などから古墳時代後期後半～飛鳥時代前半にかけての古墳群であることがわかりました。

木津川流域は横穴式石室の古墳が少ない地域として知られていますが、今回見つかった古墳は、2～3世代にわたって造られた在地の有力者の墓であったと考えられます。



北大塚1号墳全景 (石室全長 9.9m、玄室幅 1.5m)



遺跡が語る京都の歴史

戦国時代の丹波の山城

三ノ宮東城跡（京丹波町三ノ宮）

16世紀前半に築かれた三ノ宮東城跡は京都府の中央、丹波高地に所在します。眼下の平野部や京都府の中丹地域や大阪に通じる道路を見下ろす丘陵上に位置します。曲輪や堅堀、切岸、虎口がよく残っており、最高所の曲輪では3棟の礎石建物をはじめ当時の食器や甲冑などが検出されています。丹波地域を代表する山城の一つです。



上空からみた三ノ宮東城跡

発掘調査

よもやまばなし

国土座標のはなし

遺跡や古墳の正確な位置を記録するためにX・Y座標値で表される国土座標を用いて測量をしています。日本列島を19分割の座標系に分け、京都府は第6座標系に位置します。福井県高浜の東経136度、北緯36度に座標の原点があり、これを基に、調査地に基準杭を設置し、測量や実測を行っています。

座標を記入することで、一片の土器であっても日本のどこで出土したのか、ミリ単位で知ることができます。



6系の座標原点とその範囲

【発行日】平成30年3月

【編集・発行】

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



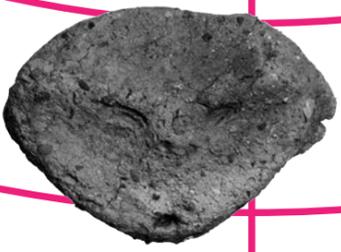
もっと知りたい

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都の遺跡 第2号



マジカル
ミステリアス
縄文
ツアー



土偶：三河宮ノ下遺跡 実物大

石棒：薪遺跡 実物大

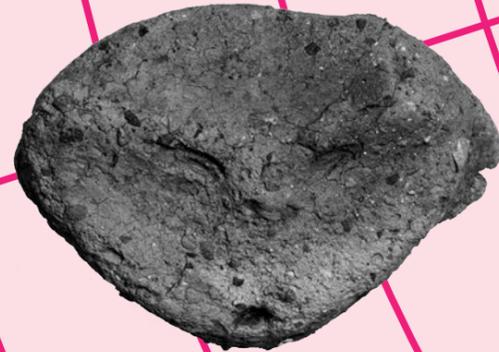
現代にも息づく
一万年の祈りとは・・・

それは祈りの時代だった・・・

縄文時代。自然を巧みに利用しながら生活する時代が1万年以上続きました。
自然と共存しながらもその自然にもあそばれ、困難に直面したとき、彼らには「祈る」ことしかできませんでした。

縄文のスーパースター

独特の造形で多くの人を惹きつける土偶は、もともとは安産を祈願する女性の人形です。多くの土偶は胸などの女性的特徴のほか、妊婦のお腹に見られる正中線を表現しています。さらには出産シーンを表したと考えられる土偶さえ存在しています。これまでの研究によれば、意図的に土偶を壊す儀式が行われたと解釈されています。人が災いに遭わないように、人形に身代わりになってもらうという考えは、現在の儀式や祭りでもよく見かけられます。



首から下が失われた土偶
(福知山市三河宮ノ下遺跡、縄文時代後期)

マツリのシンボル

石棒は陽物を模した縄文時代の石器です。特に縄文時代中期末～後期前半の石棒は、非常に大型で迫力があります。東日本で多く見つかっています。関西では珍しく、京田辺市薪遺跡で見つかった石棒もその貴重な例の一つです。本来は数人がかりでないと動かせないものなので、豊穡を願うムラでのマツリに使われたのでしょうか。東日本の石棒では、火で熱した痕跡、意図的に壊したと考えられる痕跡、擦ったような痕跡などが観察されています。ムラの人々が集まり、石棒を使ったマツリの内容と、そこに生きる人々の姿が解明されつつあります。



残存する長さは30.5cmで、重さは14.6kgです。
本来は1mほどの長さがあったようです。
(京田辺市薪遺跡、縄文時代後期)

子を失う哀しみ

縄文時代、土器に遺体を納める棺に使用したものがみついています。多くの場合、人骨は遺っていませんが、遺っている例もあります。近年の研究では、乳離れする前の子どもを土器に納めて埋葬したとする考えが有力となりつつあります。縄文時代の平均寿命は30歳と考えられています。縄文時代には、母と乳飲み子の関わりは長かたつと考えられます。なぜなら一般的に栄養状態が良いと乳離れが早く、悪いと遅くなるからです。それだけに子を亡くした哀しみは、現在と同じくらい深かったと考えられます。



棺として使われた土器
(大山崎町下植野南遺跡、縄文時代晩期)



謎の道具

公家などが着用した冠にその形が似ていることから名付けられた石冠です。石冠の用途は今のところ不明です。実用的なものとする説では斧や武器、食物の加工に使うとする考えがある一方、儀式などで使ったとする説もあり、専門家の間でも意見が一致していません。

石冠は縄文時代晩期の中部地方を中心に東日本で多く見つかるもので、関西で見つかるのは珍しいことです。



東日本とのつながりを示す石器です。
(長岡京市友岡遺跡・伊賀寺遺跡、縄文時代晩期)



小型化した石棒
(左1点:福知山市岡ノ遺跡、右2点:八幡市木津川河床遺跡、縄文時代後期)

変わる祈りのかたち

縄文時代中期には大型だった石棒も、数百年を経た縄文時代後期後半～晩期には非常に小型化して片手で持てる大きさになります。石棒の石材には、和歌山や徳島方面で採れる結晶片岩と呼ばれる石が使われており、材料に対する強いこだわりがうかがえます。

小型化した石棒は手をもって使用されたと考えられています。儀式ではこれらを“チャンバラごっこ”のように使ったという魅力的な説もあります。道具の変化から祈りのかたちが変化したことがうかがえます。



受け継がれる祈り

府内のとある神社に祀られている石製の円柱は、全長95.3cm、重さ57.5kgで、石柱の一端は笠のような形をしています。安産の神様として長らく信仰を集めてきましたが、これが縄文時代中期～後期の石棒だと判明したのは、21世紀を迎えようとしていた頃のことです。おそらく土の中から奇妙な形の石を発見した後世の人々が、「これは有難い物に違いない」と思い大事にしたのでしょう。

豊穡や子宝を願って石や木の陽物を奉る祭は、中世以降に始まったとされ、今でも日本各地に現存しています。人間の素朴で切なる願いは、時間を越えて通じ合っています。

土器・石冠
土偶・石棒

近世	近代
	江戸時代
	安土桃山時代
中世	戦国時代
	室町時代
	南北朝時代
古代	鎌倉時代
	平安時代
	奈良時代
古墳時代	飛鳥時代
	後期
	中期
弥生時代	前期
	後期
	中期
縄文時代	後期
	前期
	早期
旧石器時代	草創期